

# 諦めない女—All's Well That Ends Well の Helen の場合

大阪芸術大学 文芸学科 教授 団野 恵美子

16世紀から17世紀にかけて、約150年もの間、イギリスでは女性向けの日常生活の手引書、女性の地位に関する論説や説教集、礼儀作法書が出版されてきた。父権制社会における女性の立場や結婚について、家庭生活手引書などの影響があることは、エリザベス朝演劇の端々に明白である。

シェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)の『終わりよければすべてよし』(All's Well That Ends Well, 1603)は、人生や人間の行為に対して現実的で皮肉な見解が目立ち、問題劇の一つと見なされている。ボッカチオ『デカメロン』、ペインターの英語版『快楽の宮殿』を種本としており、美德と才能に恵まれたヘレナが高慢で卑怯なバートラムを執拗に夫として求める理由や、ほら吹きで臆病者のパローレスが戦場や兵士たちの現実的な面を曝し続けること、最終幕にはバートラムの非道さが次々と暴露され、調和のとれた世界に戻るはずの喜劇としては解釈上の問題を抱えている。

## 1. 劇の概要と特徴

ルシヨン伯爵未亡人に育てられたヘレナは、その一人息子バートラムと身分違いの恋を実らせるために一計を案じる。名医であった父の遺した処方でフランス王の難病を治療し、その褒美として夫を手に入れる魂胆である。伯爵と医師の娘という身分違いの結婚を嫌悪し、バートラムが戦場へ逃げた後も、「先祖伝来の指輪を手に入れ、自分の子を宿すまでは夫婦とはならない」という難題をヘレナは自らの才覚で乗り切ろうとする。

伯爵邸を去り、フィレンツェへ巡礼者として訪れたヘレナは、宿の女主人の娘ダイアナがバートラムに執拗に口説かれているのを知り、ベッドトリックを計画してダイアナに入れ替わり、バートラムの指輪を手に入れ、フランス王から譲られた指輪をバートラムに贈る。

ヘレナの死の噂を聞いたバートラムが後悔してフランスに帰国し、伯爵家の友人の娘と結婚する運びとなるが、贈った指輪が王からヘレナに与えられた物であったため、ヘレナ殺害の疑いがかかる。その場にダイアナと母親がフィレンツェでの行状を訴え出て、バートラムの嘘が明るみになり窮地に陥る。そこにヘレナが現れ、先祖伝来の指輪はヘレナがベッドでもらったこと、子どもを宿していることを告げ、バートラムは許され夫婦となる。

後ろ盾も地位もないヘレナが目的を達成する過程には、他の喜劇には見られない特徴がある。シェイクスピアの劇作品には非常に珍しいことに、芝居の最初の台詞は伯爵未亡人であり、ヘレナや伯爵未亡人、それにダイアナの独白など女性の台詞が多くを占める。それに対して、男性で独白があるのは臆病なほら吹きのパローレスだけである。

## 2. 処女性についての問題

パローレスはヘレナに「処女はそのまま寝かせておくとくすんでくる商品で、長く置くと値打ちが下がる」「処女は年寄りの宮廷人と同じ、帽子は流行遅れで帽子のブローチや爪楊枝は廃れている」「処女は萎びたフランス産梨で、汁気がない」と日用品を例に、処女性は自然の資源の無駄遣いだと説く。バートラムとの結婚前から、純潔についての議論が繰り広げられることから、処女性という美德が相対的なもので、処女を失わなければ子どもは生まれず國の繁栄に反することとなる。

結婚後のヘレナが妻という地位と処女性を交換する決意をするのだが、バートラムの妻であると吹聴できるのは、処女を喪失して子を孕めた後になるからで、結婚まで純潔を守らなければならないダイアナとの対比で再び議論が繰り返されることになる。ヘレナの計略で、ダイアナはバートラムの先祖伝来の指輪をもらい同衾したことになったので、名譽ある家柄を伝える指輪と純潔の象徴である処女の交換は同等であるように見えて、そうではなくなる。バートラムには指輪という金銭で買った女性であり、「安い値で買える程度の物」と認識されている。純潔が名譽ある結婚に結びつかないとき、その美德をどう描くかが新たな問題となっている。

## 3. 難題と日常生活の知恵

バートラムはヘレナを貧乏医者の娘と蔑み、王からも肩書がないだけで嫌うなど説得される。彼は美德とは生まれと武勲にあると信じており、彼の母が「失った名譽は剣を振るっても取り戻せない」と伝言し、王でさえ「我々の血は一緒にすれば色も重みも区別がつかない」と、美德は生まれだけに関係ないと諫めるのに、聞き入れない。戦場での現実的な状況は、パローレスの臆病さに表れ、言葉ではなく行為にこそ人間の名譽が示されると諷刺される。その上、バートラムはダイアナを誘惑し捨てる行為により、自ら名譽を捨てることになる。

ヘレナは名譽について「自らの行為で手に入れる方が先祖から受継ぐより立派だ」と考え、王の病気を父の処方箋を用いて癒し、バートラムと結婚するための土台を固める。「天も私たちが自由に動く余地を与えてくれる」「どんな女でも自分の取り柄を見せようと努力すれば、恋人を取り逃がすはずがない」と才覚を信じ、自ら愛を求めて行動する。慎み深さの下には、王を病から救った褒美に夫を選ぶ権利をくれと要求する自我が存在する。バートラムの難題にも怯むことなく、合法的な詐欺と認めたベッドトリックの計略は、指輪と子どもを見せるまでは妻と認めないという夫の命令に従いつつ、夫の本意を無視して妻の地位を諦めないものである。ヘレナの行動は日常的で現実的な手段を取って夫をやりこめる賢さ、したたかさを称賛する方へ導かれる。